

# 松山棟庵訳述『地学事始』に関する一考察

源 昌久\*

Shokyu MINAMOTO

Matsuyama Toan's Study Based on Western Works:  
*Chigaku kotohajime*(Introduction to Regional Geography)

## I はじめに

本稿は、明治初期の地理教育において使用されたテキストがいかなる意図のもとに著述・編纂されていたかについての一端を考察するものである。筆者(源:1977)は先に、「福沢諭吉著『世界国尽』に関する一研究―書誌学的調査」を發表し、挿絵図を中心に原拠本の調査をおこない、明治地理学形成前史の基礎的資料を提示した。今回、松山棟庵(1839(天保10)-1919(大正10))訳述『地学事始』(1870年刊)をとりあげ、その原拠本の内、一冊を確定することを試みる。

その際、いくつかの留意点があった。第一に、医学者松山棟庵がなぜ地学(地理学)書を訳述するようになったのか。その意図を探求したい。第二に、『地学事始』と彼の師福沢諭吉(1834(天保5)-1901(明治34))訳述『世界国尽』(以下、『世界国尽』と略す)とを比較し、その同一あるいは相違点を調べたい。第三に、松山は、原拠本を参照する時、いかに翻訳し、自著へ取り入れているか。どの部分を訳し、あるいは省略(削除)しているのかを原本と校合する。翻訳プロセスを通じて、松山の語学に関する基礎力および思考過程を分析する。

以上の留意点を踏まえて、『地学事始』の明治地理学形成前史における位置を解明したい。

なお、本稿中のタイトル、固有名詞、引用文は、本誌の執筆要領に従い、出来る限り常用漢字を使用し、変体仮名・異体字は通行の表記に改める。引用文の振り仮名は、原拠に拠らず地名等、最少限度に止める。[ ]記号は、定められた情報以外から得た原綴や数字を補記した場合に使用する。( )記号は、説明を加え、限定する場合に使用する。

## II 松山棟庵の略歴(訳述書のリストも含む)

### 1. 略歴

『地学事始』の刊行時期を中心に本稿の趣旨に沿って松山棟庵の略歴について述べてみる。

松山は紀州那賀郡荒川庄神田村(現在の和歌山県紀の川市桃山町)の蘭方医松山莊太夫俊茂(?-1885)の四男三女の末子として生まれる。1854(安政元)年から1859(安政6)年まで京都新宮塾新宮涼民(1820-1875)門下で和蘭医学、漢籍を学んだ。傍ら、碩儒岩垣月洲(1808-1873)に就いて経史(経学と史学)、遠山雲如(1810-1873)に就いて詩を学ぶ(最初、兄の新宮涼介(1822-1875)の処に食客)。一時、京都から郷里に戻り、医術を開業する(鈴木1943:14-16)。岩垣月洲は経済実践を主とし、1846(弘化3)年に京都の習学所[学習院]<sup>1)</sup>教授に任ぜられた人物である(市古(ほか):199)・(安岡:183)。遠山雲如は、「詩を以て盛名あり」(関:339)と記されている。これらの「漢学者漢詩人に就て学んだ位であるから、作詩は得意中のものであった」(鈴木:172)と記され、松山が言葉のセンスに長けていたことが判る。これらことは、後年、英書の翻訳をする際の基礎力となり、訳文が単なる逐語訳ではなく原文に忠実でありかつ読者に解り易い文章になっている理由である<sup>2)</sup>。

1866(慶応2)年に上京し、英学の習得のために福沢諭吉の塾<sup>3)</sup>に入門<sup>4)</sup>する(鈴木1943:18)。1867年、福沢は、第3回目の海外見聞として幕府の軍艦受取委員の一員として、再度、渡米した。渡米中、福沢は地理書他を含む学校用教科書を大量にしかも同じ書物を複数部、購入した。<sup>フリント</sup>

1868年、福沢の将来本普林篤[Austin Flint]の内科書(原書の刊行年は、訳本の「見返し」に1867年刊

\* 淑徳大学名誉教授

と記されている)のチフスの部分だけを抄訳し、『室扶斯新論』(後述)として刊行する。1870年冬、米国で出版された地理書および歴史書を訳述し、『地学事始』(後述)を刊行。1873年4月、Sargent's standard third readerを抄訳し『サンゼント第三リイドル』(後述)として上梓。1874年2月、訳『傑氏万邦史略』(後述)を刊行。

以上のように、この時期において単独での訳書として『室扶斯新論』以外、医学者である松山は、彼の専門とは異なる分野、しかも初学者向けとも見受けられる書を訳述している。その理由の解明のヒントが福沢から松山宛ての手紙(1869年2月20日付け)にしるされている。慶應義塾(2001: 114-115)によると、

随てリードル其の外モラル、フヒロソヒーの訳書も開版いたし、只管コモン、エヂュケーションに心を用ひ、…。故に翻訳書を多くし、手習師匠を其儘改革して、事々物々朝々暮々の話しに天地万国世界諸国のことを自然に知る様程度義に御座候

と記し、教育分野の入門クラスの翻訳を福沢は松山に薦めていることがうかがえる。

松山の私生活について鈴木(1943: 269-275)を参考にして述べてみよう。

1869年(年齢)32歳 長女 吟子誕生。

1871年 33歳 妻子を携え上京し、福沢邸に入る。

1873年 35歳 長男 陽太郎誕生。

このような私生活の中で、子供への関心が高まってきた可能性も考慮されるのではなかろうか。

以外の主だった経歴として、1871年6月、慶應義塾医学所が開校し、松山は校長となる。1871年、大学東校(1869年12月17日、医学校は大学東校と改称)で大学出仕中助教席として「治療書翻訳」にあたる(東京大学百年史編集委員会1984: 218)<sup>9)</sup>。1891年、東京慈恵医院医学校発起人となる(校長 高木兼寛(1849-1920))。開業医としては、1877[明治10]年に医業を開始したようであるが、鈴木(1943: 84)によると、「開業医として全身挙げて力を注ぐことの出たのは明治二十[1887]年以後の事」と記されている。

## 2. 訳述書のリスト

松山の主な訳述書(校閲を含む)を紹介する。

- ・『室扶斯新論』松山棟庵訳述 2巻 1868年刊。
- ・『地学事始』松山棟庵訳述 3巻 1870年刊。
- ・『黴毒小箒』近藤 薫<sup>6)</sup>筆記、松山棟庵校閲。1872年刊。

本書の題言によると、アメリカの医師 設孟斯氏の講述した黴毒治療の概則を筆記したものの。

- ・『サンゼント氏第三リイドル』2巻 松山棟庵訳 2巻 1873年4月刊。

府川(2008: 141)によると、本書中にグリム童話(「くぎ」)の本邦初訳作品が含まれている。原書は複製され慶應義塾の教科書として使用されている<sup>7)</sup>。

- ・『初学人身窮理』松山棟庵、森下岩楠<sup>8)</sup>合訳 2巻 1873年8月刊。1876年再刻。

原著は凡例によると「亜国[アメリカ]ノ大医カトル [Calvin Cutter] 氏」と記載されている。島田(2008: 128)は、「初学者及び一般向けの英語書からの翻訳書」と解説している。唐澤(1982: 37)は「本書は小学校の上級用として広く用いられていたものである」と述べている。(筆者は1876年版の覆刻本を参照する)

- ・『傑氏万邦史略』5巻 松山棟庵訳 1874年刊。

本書の凡例(1874: 凡例1丁(オ))によると、「原本ハ米人傑爾寧 [Martin Joseph Kerney] 氏ノ著述」と記されている。序において、福沢諭吉(松山(1874: 序2丁(ウ)))は「松山氏ノ此書ヲ訳シタルハ唯学者ヲシテ万国古今ノ沿革ヲ知ラシメントスルニミニ非ズ…」と記している。

- ・『新業性功』土屋寛信<sup>9)</sup>抄訳 松山棟庵校 1876年刊。
- ・『初学人身窮理後篇』松山棟庵編纂 3巻 1880年刊。
- ・『葉説簡明 一名 薬物韻府』新宮涼園<sup>10)</sup>・松山棟庵共訳 1882年刊。
- ・『実用眼科要領』坂本育太郎<sup>11)</sup>纂述 松山棟庵校 1892年刊。

本書の凡例に「恩師松山棟菴先生ノ校閲」と記されている。

## III 『地学事始』の書誌的調査および内容

### 1. 書誌的調査

管見のかぎりでは、本書の異版を一種見出した。ただし、子細に点検すると、表紙の色等が異なるものもあるが、同一と見なした。

1) 地学事始 3巻 松山棟菴訳述 慶應義塾出版局 明治3(1870)年(季冬)(木版) 小(18cm) 筆者蔵

注記 扉に「慶應義塾版之印」あり。一部色刷。折り込み地図あり。

本稿での引用文は本版を使用する。

2)地学事始 3巻 松山棟庵訳述 尚古堂 明治3  
(1870)年(季冬)(木版) 小(18cm)

注記 扉に「慶應義塾版之印」あり。一部色刷。折り込み地図あり。

尚古堂は「岡田屋嘉七」(江戸の書肆)(井上1998: 91)のこと。『世界国尽』の発売元でもある。

1)の覆刻本か。文字を詳細に比較すると、異なる点を見出す。例えば、扉中にみられる「明治」の「治」は両者では明らかに異なる。1)の外題紙(題簽)には「初編」の語がない。

(国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>))の資料を閲覧。以下、同様のものは文献記載末にDLを付す。)

(内容)目録1)、2)共に同様)

巻の一[本文]

地学事始序

凡例

目次

巻の一

世界の状と世界の動く事(他略)

亜細亞洲(国名略)

巻の二

歐羅巴洲(国名略)

巻の三

亜非利加洲(国名略)

北亜米利加洲(国名略)

南亜米利加洲(国名略)

大洋洲(国名略)

## 2. 内容の検討

松山は序(1870: 巻の一2丁(オ))で、本書訳述の目的について次のように述べている。

今此小冊子ハ地球の概略をなしとの文辞鄙俚も厭はずして通俗を主とし幼童女子をして聞見の端を開き日本の外にも尔国あるをしらしめんとするものなり...明治三年庚午晩秋 慶應義塾同社識

児童婦女子向きの世界地誌を意図して、作成されている。これは福沢(1869: 巻の一序1丁(オ))の『世界国尽』の序に記載されている、「児童婦女子の輩をして世界の形勢を解せしめ、其知識の端緒を開き、...」に通じる。松山は、福沢の婦女子向けの態度を見習ったのであろう。

訳述の種本について、松山本人(1870: 巻の一凡例)が「一 此書ハ亜米利加開版の大小地理書及歴史書等より訳出する所なり」と記している。ある特定の書物を翻訳したのではなく、数種の米国の出版物からの訳出の組み合わせである<sup>12)</sup>。筆者の本稿の目的のひとつは、翻訳に利用した原本の一種を特定することにある。

『世界国尽』の上梓が「明治二(1869)年初冬」であり、『地学事始』は「明治三(1870)年季冬」に開版された。刊行時期に満1ヵ年の差がある。両書の違いおよび類似点をみてみよう。

本文の世界地誌の記載順序は、『世界国尽』がアジア→アフリカ→ヨーロッパ→北米→南米→大洋洲である。一方、『地学事始』では、既述のように、アジア→ヨーロッパ→アフリカ→北米である。この相違の理由は、現時点では不明である<sup>13)</sup>。

外国地名の表記には違いが多数見受けられる。

いくつかの例を表1に記載する。

福沢は『世界国尽』の六の巻全巻で系統地理に言及し、総合的な地理書とみなされる。松山は、巻の一において系統的地理を概観(八丁分)するのみで、『地学事始』は世界地誌の書物である。

本文中の挿絵図(風景、人物)の数量をしらべてみよう。『世界国尽』では全体で108図がカウントされ

表1 地名の表記の比較

『世界国尽』		『地学事始』		備考
本文表記	振り仮名	本文表記	振り仮名	
英倫	ゑんぐらんど	英倫	ゑんげらんど	England
阿爾蘭	いるらんど	阿爾蘭	あいるらんど	Ireland
須徳保留武	すとくほるむ	須徳堀武	すとくほりむ	Stockholm
	どぶりん	樹武林	じゅぶりん	Dublin
良宙羅多	らぶらた	良宙羅多	らぶらだ	La Plata
池鯉の国	ちりのくに	池鯉	ちり	Chile
澳大利亞	あふすたらりや	澳大利西亞	あふすたりしや	Australia

(筆者作成)

る(源1977: 6-8)。『地学事始』では15図である。『世界国尽』の二割以下である。ただし、『地学事始』においては前述のほかにも国旗(色刷)が国別地誌に付記されている。筆者は、松山が当時の読者に世界各国の国旗を教示した意義を認める<sup>14)</sup>。

本文の書体(木版・整(製)版)についてみてみよう。『世界国尽』は草・行書体で、大きさは半紙判(半)(25cm)である。本書は習字の手本としても使用された。漢字は総振り仮名付きである。『地学事始』は楷書体で、大きさは(小)(18cm)である。漢字は総振り仮名付きである。

## IV 『地学事始』の学校教育における使用

### 1. 学制以前

島津(2005: 37-38)・中川(1978: 21)によると、学制(1872(明治5)年)公布以前から「小学校」では幼年者に組織的な初等教育が各地で実施されていた。例えば、池田(1902: 160)・佐藤(1986: 58)によれば、京都府において、1871(明治4)年に公布された「小学課業表」では第五等から第一等(学年は五等から始まり一等までの等級)の全ての等級に地理的内容が含まれている。なお、教科は句読・暗誦・習字・算術の四科である。第4等の句読に『世界国尽』、第3等の句読に『地学事始』が使用されている。ここでは読本の材料として、地理書を選定している。

### 2. 学制時

学制発布に伴い、文部省(内閣官報局1974: 1214-1229)は1872(明治5)年9月8日に「小学教則」(現在の学習指導要領に相当)<sup>15)</sup>を制定した。そこで尋常小学を下等小学と上等小学に区分し、各八級に分け下等八級から上級一級まで、その各を期間6ヵ月と定めた。使用する教科書を示した。

『世界国尽』は下等第四級の地学読方、同第二級の地学輪読、第一級の地学輪読に教科書として挙げられている。

『地学事始』は下等第一級の地学輪読に『世界国尽』と併記されている。

1873(明治6)年5月19日に文部省(内閣官報局1975: 1538-1555)は、「小学教則」を発布した<sup>16)</sup>。ここでも教則に使用する教科書および取扱い方が「小学教則」(1872年頒布)と同様に記載されている(配当時間を変更)。

なお、海軍省(1872(明治5)年2月27日設置)内に同

年3月7日、翻訳局が設けられた。同年4月14日、翻訳局に必用の図書として『地学事始』、『輿地誌略』、『西洋事情』等がリストアップされ秘書局にお買い上げの申し出がでている<sup>17)</sup>。海軍省として備品として必用と考えられていたのではないか。この点から、『地学事始』は、婦女子をはじめ軍人にも読まれる図書と見なされていた推察される。

## V *Cornell's High School Geography* の解説

*Cornell's High School Geography*(405p. illus.) (以下、*HSG*と略す)はSarah Sophia Cornell(? -1875)<sup>18)</sup>の著作として1856年にNew YorkのD. Appleton & Co.から刊行された。

タイトル・ページ(標題紙)は該当図書を同定識別する第一要素であるので、タイトル・ページに記載されているサブ・タイトルを以下に写してみる。

Forming part third of a systematic series of school geographies, comprising a description of the world; arranged with special reference to the wants and capacities of pupils in the senior classes of public and private schools. Embellished by numerous engravings, and accompanied by a large and complete atlas, draw and engraved expressly for this work.

ここから判明することは、a systematic series of school geographiesの第三番目の図書であることがわかる。他の図書はStepleton and Steck(1970: 132-135)によると、*Cornell's first step in geography*(1858), *Cornell's primary geography*(1855), *Cornell's intermediate geography*(1855), *Cornell's grammar-school geography*(1858)である。

本書に付属している‘a large and complete atlas’が存在していることも記載されている。Atlasについても、Stepleton and Steck(1970: 132)中に、

Cornell's companion atlas to Cornell's high school geography. ...N.Y., Appleton, 1856. maps +8p.

を見出した。

同アトラスの年次の異なるもの(1870年)が国立国会図書館に所蔵されている。そのサブタイトルを以下に記載する。

Comprising a complete set of maps, designed for the student to memorize, together with numerous maps for reference, etc.

同アトラスを以下、CCMと略す。HSGと共に活用され、レファレンス等の地図として使用されていることが判る。

OCLC WorldCat Identities (Cornell, S. S.) によると、HSGは、1856年(初版)から1880年までの期間に英語版で27版が刊行されたと記されている。CCMは同期間、英語版<sup>19)</sup>で14版が発行された。なお、CCMは、英語版で1857年から2012年の期間では18版が発行された。今日でも、文化的意義から本書の複製本(複製本)が発行されている<sup>20)</sup>。

HSGおよびCCMが当時、アメリカでいかなる評価を受けていたかについてを調べて見よう。発刊後、直ちに*The United States Democratic Review* 4 (Nov. 1856 p. 344) に書評が掲載されている。「本書[HSG]は、世界中の人口調査データに基づく方針に従って、最新の注意と絶え間ない配慮に基づき編纂されている。地図帳[CCM]は、美装され、生徒の学習の手助けのために外国地名の発音も付されている。全体的に完成されたものであり、我々の教育システムに十二分に適合している」と評価されている。記載誌名(変遷:別タイトル*The United States Magazine, and Democratic Review*)を手掛かりに本誌を調査すると、溝口(1995: 5)は「[本誌は]...当時の優れた作家が投稿する一流の文芸雑誌であった」と述べている。

アメリカの当時の社会状況およびハイ・スクールについて概観してみよう。独立戦争(1775-1781)から南北戦争(1861-1865)にかけ、産業の順調な発展がみられ、ほぼ一世紀に渡ってアメリカは全盛を誇っていた。宮地(1984: 31-35)によると、中等教育機関として、世俗的なアカデミー(ほぼ私立校)が19世紀の半ばころまでに、南部や中部にも普及した。無償の公立中等学校は、1821年ボストンに設立されたEnglish Classical Schoolであり、3年後にEnglish High Schoolと改称された(田代1977: 73)・(宮地1984: 53)。ハイ・スクールは、19世紀半ばには徐々に普及したが、本格的な発展は、19世紀末以降である。

ハイ・スクールにおける教科について見ると、伝統的教科(ラテン語、数学等)と現代的教科(地理、英語等)とから構成されている。宮地(1984: 70)の「19世紀後半のハイ・スクールの教科目—シカゴ周辺」表(カッコ内の数字は教科を開講している学校

数)を参考にすると、1860-1865年(20校)の「理科」に「自然地理(17)」「地理(2)」が含まれている。1896-1900年(40校)の「理科」に「自然地理(30)」「地理(2)」「自然地理(1)」が含まれている。HSGおよびCCMは、ハイ・スクール(公立・私立学校)で「地理」の教科書として採用されたと思われる。

HSGおよびCCMの日本への将来本について述べてみよう。

大庭(1996: 35-36)によると、「佐倉藩(1856年版)や黒羽藩作新館(1870年版)などの藩学校にも所蔵されており、当館[静岡県立中央図書館 葵文庫]外国語史料でも1冊[1860年版]所蔵している」と書かれている。黒羽藩作新館所蔵について、黒羽町教育委員会社会教育課(1981: 84)『黒羽藩校作新館旧蔵図書仮目録』によると、前記館ではHSG 1870年版7冊、CCM 1869年版7冊が所蔵されている。佐倉藩所蔵本について、池田(1965: 11)は「佐倉藩でもよく読んだらしく、表紙脱落し最初の部分汚れている」と書志に付記されている。国立情報学研究所(Nii)のCiNiiでHSGの所蔵館調査をすると、6大学で所蔵し、1864年版から1870年版までにおいて18冊が見出される。

日本への将来時期について、斎藤(2009: 31)によると、葵文庫本の印記から本書は、旧蔵が番所調所であることから、1860年から1862年に将来されたと推定されている。

慶應義塾が所蔵しているHSGについて述べる。II.1で既述したように福沢は、1867(慶応3)年1月から同年6月まで、江戸幕府の軍艦受取委員として再度、渡米体験をした。渡米中、彼は地理書を含む学校用教科書を大量にしかも同じ書物を複数部、購入している。金子(1979: 110, 111)によると福沢は、『藩学養賢堂蔵洋書目録』の記載からHSG 34冊、CCM 33帖を仙台藩のために購入したことが判る。福沢自身の塾用テキストも同時に輸入したであろう。現在、慶應義塾図書館に所蔵されているHSG(図1参照)は1868年版でタイトル・ページには“慶應義塾之印”および“慶應義塾書館”という蔵書印二顆が捺印されている。墨字で“第三十九号”と書かれている(以下、本稿での引用文は本書を使用)。従って、再度の渡米時期に購入したものではない。“慶應義塾之印”から判断して、本書は1868年4月以降に塾で授業用として、学生貸借のため墨字で番号を記したものと推定される<sup>21)</sup>。

塾でのHSGを使用していた授業での使用状況を見てみよう。

慶應義塾(1958: 282)によると、1868(明治元年)年

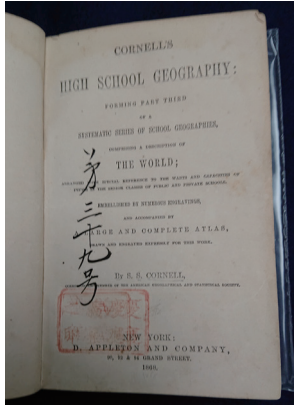


図1 HSG (慶應義塾図書館所蔵本) のタイトル・ページ

の「日課」表に「コルネル氏ハイスクール 一、地理書素読 小幡篤次郎<sup>22)</sup> 日曜日の外毎日 朝第九時より第十時迄」、慶應義塾福澤研究センター (2004: 35)によると、1873 (明治6)年の「科業表」に「予備等年数三年 稽古四時間 初年 第一期 (略)コルネル ハイスクール地理書 第二期 同上終ローマ史始ル」と明記されている。

HSGの概要をみてみよう。表2に内容をまとめてみた。3パート、つまりDescriptive geography (地理の概説に相当)、Mathematical geography (明治初期の訳語では幾何ないし星学地理)、Physical geography (自然地理ないし地理)および附録から構成されている。

表2 HSGの内容 (概要)

序		p. 3-4
<b>パート I Descriptive geography (地理の概説)</b>		
レッスン 1-6	定義 (問答形式)	p. 5-16
レッスン 7	世界*	
レッスン 8-17	北アメリカ	p. 20-38
レッスン 18-67	アメリカ合衆国	p. 39-134
レッスン 68-78	(その他の国々)	
レッスン 79-91	南アメリカ	p. 152-172
レッスン 92-132	ヨーロッパ	p. 173-253
レッスン 133-144	アジア	p. 253-278
レッスン 145-153	アフリカ	p. 279-301
レッスン 154-160	オセアニア	p. 302-319
レッスン 162-164	世界主要国：国名、国家形態、主だった宗教	p. 320-322
<b>パート II 幾何 (星学) 地理</b>		
Ch.1-2 定義	定義	p. 323-330
レッスン 1-2	復習問題	p. 330-332
<b>パート III Physical geography (自然地理)</b>		
Ch.1-16	定義、陸地と水域との分布、他	p. 333-383
レッスン 1-6	復習問題	p. 383-390
本書で学習する生徒への提示		p. 390-391
<b>附録</b>		
地球の自然区分のためのルールー術語の定義と例示を含む		p. 392-395
地図の内容を記憶するための指針		p. 396-397
地球儀		p. 397-398
地球儀上の問題を解決するためのルール 1-18		p. 399-401
用語集		p. 402-405

\*□：小項目見出し

(筆者作成)

パート I のレッスン1～6についてはVIでのべる。レッスン8以降の国(州)別地誌の解説を記す前段階として、コルネルは本書の特徴の一つである、“map studies-systematically arranged”(システムの地図学習)を準備している。地誌の解説にあたり、地図帳を活用して、該当地域の地名、境界、形状等を問答形式で事前に学ぶように構成されている。これは姉妹書CCMとの対応を示している。随時、復習問題が取り入れられている。

各国(州)の記述形式は、国旗(単色)、人口、国土の広さが始めに記されている。次に、地理的位置、(国家組織)、土壌、気候、住民、交通機関、産業、都市他が項目(太字)別に羅列的スタイルで書かれている。同じ項目を各国(州)間で比較できる。19世紀中葉の世界各国および米国の各州の地域性を明らかにしている。

アメリカ合衆国は表2でしめした通り、p. 39～p. 134.合計96pであり、本書の総ページ数の23%を占めている。HSGがアメリカの地理情報を重視したハイ・スクール向け地理(学)教科書であることをこのことは明示している。

パートII、パートIIIは章(Ch.)別に構成され、随時、復習問題が組み込まれている。

附録、用語集(用語の解説、地名の語源等を説明)は生徒にとり学習の手助けとなろう。

## VI 『地学事始』とHSGとの比較

松山は『地学事始』を執筆する際に、HSGをどのような姿勢で翻訳に活用したのであろうか。例えば、

・該当箇所において、HSGに記載されている部分を全て松山は訳出したのか。

・『地学事始』に記述されている箇所HSG以外の資料を利用・参考にしている部分は存在するか。

・その理由はなぜか。

・HSGで採用している地理学用語・地名を松山はいかに表記しているのか。

これらの点他について検討を試みる。

両書の学習順序を比べてみよう。

『地学事始』では、既述のように概説→アジア→ヨーロッパ→アフリカ→北アメリカ→南アメリカ→大洋洲の順である。一方、HSG(表2参照)では、概説→北アメリカ(アメリカ合衆国を含む)→南アメリカ→ヨーロッパ→アジア→アフリカ→オセアニア(大洋洲)→幾何地理→自然地理である。両書とも自国の所属している洲を先に述べている。

松山は幾何地理、自然地理について言及していない。つまり、『地学事始』は世界地誌の書物であり、HSGは地理学全体を記述している学校用教科書である。

本文の内容を『地学事始』の巻の一から詳細に見てみよう。

「世界の状と世界の動く事」(節)はHSG p. 5 レッスン1(問答形式)の始めの部分にそっている。「世界ハ遊星と唱ふる星の一にして...」、「地球といふ世界の円き証拠は様々なれど...」(巻の一1丁(オ))としてHSGでは7例(p. 5-6)を示しているが、松山はその内の3例(巻の一1丁(オ)-1丁(ウ))を証左としてとりあげている。

次の文「世界ニハ二様の運転あり地軸<sup>23)</sup>を周て動くを日々の私転といひ...」(巻の一2丁(オ))では私転と公転とを解説している。HSG(p. 6)では、問答形式で回転運動には2種類あり、日周運動(daily motion)と年周運動(annual motion)として説明を行っている。地軸(axis)を図(p. 6)で示す。

『地学事始』は、地軸の続きで、「赤道、黄道、子午線の類も皆之は同じ」(巻の一2丁(オ))と記す。これらの地理学用語はいずれも江戸時代の漢書・洋学書で使用されている。HSGには黄道、子午線に該当する用語は使用されていない。この節では、松山が記述する際に、HSGを部分的に活用したとみなしてよいであろう。

次節「世界の広袤」は「世界外面の一里四方を一坪と立て其長凡二億なり 此坪数の内凡四分の一ハ陸地にて...」(巻の一2丁(ウ))で始まり、地球の広さ、陸・海、北・南半球、東・西半球の解説をする。この部分は、HSGのレッスン2の前半(p. 7)と一致する。

松山は、続いて「地学者之を分別し陸地の方に大陸、嶋、半島、地峡、岬、山、岡、平地、谷等の名称あり 水海の方に大洋、海、湾、港、海峡、遠浅、湖、河等の名称あり」(巻の一3丁(オ))と記す。これは、HSGのp. 7に相当する。ただし、HSGに記載されている語 promontory<sup>24)</sup>、passageが訳されていない。人工分界、人間政事上の分界(= political divisions)、地図、地球儀についてのべている(巻の一3丁(ウ)-巻の一4丁(オ))。HSGのp. 7-8.に相当する。地図上の面の線として、「赤道、子午線、平行線、冬至線、夏至線、両極圏等の名称」、「緯線」、「経線」(巻の一4丁(オ))を解説している。HSGのthe tropics [回帰線]を冬至線、夏至線と松山は訳している<sup>25)</sup>。HSGのレッスン2の後半(p. 7-8)と一致する。

次節「世界の区別並に人種の事」は「世界の陸地ハ大洋に隔てられ分て三の大陸...」(巻の一4丁(オ)-巻

の一5丁(オ)で始まり、参考にしたと思われる箇所はHSGのレッスン7 世界(p.17)の最初の部分の古世界、新世界、三大陸の解説に相当する。

松山は、人民、五種の人種を説明する。これは、HSGのレッスン4に記載されている。世界の人口について松山は「凡十億以上」(巻の一5丁(オ))、HSGではabout one billion(p.10)と一致する。人種も一致。人種の解説に付されている図(巻の一5丁(ウ))はHSGのp.10の図<sup>26)</sup>と類似している。

『地学事始』は、これに続きアダム・イブの夫婦の「古き昔しを原るに一の奇談あり」(巻の一5丁(ウ)-巻の一7丁(オ))としてノアの方舟の話を書いている。この話はHSGには記載されていない。松山は旧約聖書の創世記に登場する人種の誕生話を挿入し、ヨーロッパ文化の一端を当時の婦女子に紹介した。

次に、国別地誌の記述を比較してみよう。本稿では、取り上げる国の選択基準を御雇外国人の官雇国籍別人数とした。イギリス、フランス、アメリカ、ドイツの四カ国がその大部分を占めている(国史大辞典編集委員会1980:924)。これらの国々は、明治初期から二十年頃までの対外関係で重要な国々であった。

ここでは「英学」にも関連し、イギリスをはじめにとりあげる。つまり巻の二 歐羅巴洲 英吉利王国(巻の二4丁(オ)-6丁(オ))とHSGのレッスン92 Europeとそれに続く、93 The British Isles、map studies (systematically arranged)、94 map studies (systematically arranged)、The United Kingdom of Great Britain and Ireland、95 map studies (Scotland)、Scotland、96 map studies (England)、England、97 map studies (Wales)、The principality of Wales、map studies (Ireland)、Ireland、98[島々]、99-101復習問題を比べてみよう。

『地学事始』では欧羅巴洲の始めの部分(巻の二 1丁(オ)-1丁(ウ))とHSG(p.173)の(項目)「地理的位置」は同一内容である。後続の文章は異なる。松山は他の資料を参考している。松山はHSGのmap studiesには言及しない(他所も同様)。

### いざりす ふれつてん 英吉利王国(即 不列顛)

『地学事始』では色刷りの木版画で国旗を掲げている(巻の二4丁(オ))。HSGでは同一デザインであるが、単色の銅版画(p.175)である。p.391に国旗中の小文字の指示(たとえば、R.→red)を記載している。松山はHSGの指示のみで色刷りを可能にしたのであろうか。『地学事始』の解説の始め部分(巻の二4丁(オ))とHSGの(項目)「地理的位置」(p.175)は同一である。『地学事始』の続きではイギリスとアメリカ合衆国と

の歴史的関連等について述べている。HSGには見当たらない。松山は他書を参考にし、歴史的観点を取り入れていることがうかがえる。なお、HSGでは(項目)「政府」、「植民地」の記述から構成されている。次にのべる英吉利王国各地の記載順は『地学事始』とHSGとは異なる。

### えんげらんど 英倫

『地学事始』では初めに、「地面五万二千二百方里<sup>27)</sup> 人民二千万」(巻の二6丁(オ))、HSGでは“Area in sq. miles, 51,200. Population, 16,700,000. Counties, 40.”(p.178)と記されている。人口がかなり異なる。人口については他国においても異なった数値が多数、頻出される。出典の違いなのであろうか。松山と同じ数値の資料は現時点では見出せない。

松山は地理的位置、地面[地表の事]、地性[土壤]、住民[国民]、移動手段[交通]、製造業・輸出、都市(巻の二6丁(オ)-巻の二7丁(ウ))について、HSGの該当(項目)を邦訳している。住民ではHSGで述べられている英国の国民が主として、サクソン族の子孫であることに訳文では触れられていない。

移動手段のなかで、松山は「鉄道」<sup>28)</sup> (railroads)、「電信機」(electric telegraphs)をHSGと同様に紹介している。福沢(1869:巻の三7丁(ウ)-巻の三9丁(ウ))は『世界国尽』の中で「電信機」、「蒸気車」<sup>29)</sup>について挿絵図を付して説明をしている。

HSGの(項目)「製造業・輸出」(p.179)の終わりの部分に書かれている「製造品の内、綿布、毛織物、鉄製品が極めて重要である」を訳出していない。都市について、松山は論頓とグリーンウィッチをHSGと同じような内容で取り上げる。ここで「河底を穿て通行の道」としての「トンネル」<sup>30)</sup> (a tunnel) (巻の二8丁(オ))が記され説明されている。当時、国民一般が「トンネル」、「鉄道」に該当するものを見ていない。松山は、「文明開化」にふさわしい事物を訳文の中に解り易く取り入れている。

HSGに記載されている他の都市ニューキャッスル等は省略されている。

### すとつとらんど 蘇格蘭

『地学事始』では英倫と同様に国土面積、人口を記載している。人口は異なる。地理的位置から自然的関心事(巻の二8丁(ウ)-巻の二9丁(ウ))までを見るとHSGの翻訳と見なすことができる。HSGの(項目)住民を訳さず、移動手段の解説へ進む。製造業・輸出も言及しない。都市はエジンボルフ [Edinburgh] のみを訳す<sup>31)</sup>。



### 豪留須 [Wales]

松山は、前記と同様に国土面積、人口を記載している。数値は近似である。地理的位置、地表、土壤(巻の二10丁(ウ))はHSGと同一(p. 181)。『地学事始』ではHSGには記載されていない「スナウドン」(巻の二10丁(ウ))の解説が挿入されている。HSGの(項目)「住民」、「移動手段」、「製造業・輸出」、「都市」については訳出していない。

### 阿爾蘭

松山は、前記と同様に国土面積、人口を記載している。地理的位置、地表、土壤(巻の二11丁(オ))はHSGとほぼ同じ(p. 182-184)。ただし、HSGに記載されている酪農場、鋳物は訳されず省略されている。(項目)「自然への関心」(natural curiosities)、「住民」、「移動手段」、「製造業・輸出」について、松山は言及していない。首府樹武林[Dublin]はHSGによる。他の都市は略されている。HSGに掲載されている“The Giant’s Causeway, Ireland”の風景画は、『地学事始』には付されていない。

### 仏蘭西帝国

『地学事始』の仏蘭西帝国(巻の二22丁(オ)-巻の二24丁(オ))とHSG(p.215-218)とを比べてみよう。松山は「地面二十萬〇四千八百方里 人民三千七百四十七萬二千七百」(巻の二22丁(オ))、HSGでは“Area in sq. miles, 204,800. Pop., 35,400,000. Departments, 86” (p. 215)と記されている。面積は一致している。

地理的位置および地表はHSGの該当箇所とほぼ同様の訳文である。土壤(巻の二22丁(ウ)-巻の二23丁(オ))はHSGの項目(土壤)(p. 215)の後半分のみを訳し、前半を記載していない。移動手段(巻の二23丁(オ))、製造業・輸出(巻の二23丁(オ)-巻の二23丁(ウ))はHSG項目「移動手段」「製造業・輸出」(p. 216)の訳文と見なしてよい。

HSG項目「住民」は訳出されていない。

都市について見ると、巴里斯、里園、丸瀬里をとりあげ、他は略す。松山は、HSGで記載されている「植民地」について言及していない。

『地学事始』には「ばりすの景色」(木版画)、HSGにはヴァンドウム広場、ポルドーの銅版画が付されている。

### (ドイツ)

ドイツ(Germany)について、『地学事始』とHSGとでは記述順序等に違いが存在している。ドイツは、1871年まで民族統一国家がなく多数の地方国家

(王国、公国等)から構成されていた。『地学事始』では普魯士王国(巻の二27丁(ウ)-巻の二29丁(オ))、北日耳曼列国(巻の二29丁(ウ)-巻の二30丁(ウ))、南日耳曼列国(巻の二30丁(ウ)-巻の二31丁(オ))の順序で解説を進めている。一方、HSGではGermanyをドイツ連邦Germanic Confederation(地方国家)(p. 229-p. 234)、後にプロシヤ(p. 236-238)について解説を行っている。

### 普魯士王国

松山とHSGとの国土面積、人口共に異なっている。地理的位置および地表も翻訳ではないように見受けられる。作物(巻の二28丁(オ))は、HSG項目(土壤)の一部の翻訳か。松山は羊、蜂、豚の飼育(p. 237)について言及していない。HSGの項目「住民」、「移動手段」、「製造業・輸出」(p. 237)に関しても松山は言及していない。

都市について見ると、邊尔林をとりあげ、HSGの解説と類似している。他の都市は略す。

松山は、ここでHSGでは触れられていないプロシヤの歴史(1701年[プロシヤ王国の設立]の頃から始まる)(巻の二28丁(ウ)-巻の二29丁(オ))に言及する。拿破侖(1769-1821)との戦い、プロシヤ王「フレテレッキ」(フリードリヒ・ヴィルヘルムIV)(Friedrich Wilhelm IV)(1795-1860)(在位1840-1860)の業績について一丁を費やし、述べている。これらの「プロシヤの1701年以降の歴史」および地方国家の統合・支配の動きの文章は、松山の歴史観を反映して、他の資料を活用し、新情報を『地学事始』に記載しているのであろう。

### 北日耳曼列国

松山は地面、人口を記す。HSGはドイツ連邦Germany properとしてハノーヴァー、メクレンブルグ他のthe German Statesを王国、公国ごとに解説(p. 229-234)しているので、北・南別の地面、人口は記されていない。松山は住民、移動手段などの情報を削除している。

北日耳曼列国では主として、「千八百六十六年会盟の決定」として普奥戦争(1866)の結果である国境画定事情(巻の二30丁(オ)-巻の二30丁(ウ))を解説している。福沢も『世界国尽』(1869: 巻の三22丁(ウ)-巻の三23丁(オ))において「去る慶應二寅年[1866]には…」とふれている。これも当時としては新ニュースであったためであろう。

このような地方国家の統合・支配の動きは、国家のフレーム・ワークを確立する上で重要である。明

治維新直後の日本国民にとり、自国の新国家設立に前述の他国の歴史的な動きを認識する必要があると松山は感じていたのではなからうか。

### 南日耳曼列国

この列国の有名国として馬田公国 [Baden]、宇留天保留富、姿々里屋王国 [Bavaria] を挙げている。地理的情報を記載している。前述のように HSG では各国ごとに解説し、『地学事始』と異なる。松山は他の資料を参考にしたのではなからうか。

アメリカについては後日、検討してみたい。

## VII 世界地図(帳)について

CCM に関連して、明治初期(翻訳教科書時代)の世界地図(帳)について述べてみよう。地理教育において地図をもちいて、地名および他の地理情報を確認することは基本である。HSG においても CCM を活用して、“map studies”を準備して、国境、地名、形状等を確認するシステムを採用している。『地学事始』では本書中に東・西半球図、五大洲図が付されている。しかし、本文に記載されている、都市名、山・川名等の地名を詳細にトレースすることは難しいように見受けられる<sup>32)</sup>。

海後(1966: 594)は、「明治七[1874]年に河合貞雅の『小學教授大日本全圖』が、またアメリカのミッチェル [Samuel Augustus Mitchell, 1792-1868] の原図を用いて作った阿部泰蔵の『萬國小學地圖』などがあった」と記している。

阿部泰蔵(訳)『萬國小學地圖』において、阿部(1874: 緒言)は「小學地理問答四巻ヲ訳セリ今又紀元一千八百七十二年刊合衆国ミッチェル氏ノ原図ヲ訳シテ小学地図ト題シ」と述べている<sup>33)</sup>。

『小學用地圖 萬国地誌略附図』において、安田(大野1877: 序)はつぎのように記している。

萬国地誌略[文部省 1874]ヲ学バザルナシ而メ世上ニ刊行スル地図始ント数十種ニ至ル

1877年当時、日本人による編纂の世界地図帳が「数十種」存在していたことがわかる。国立教育政策研究所図書館所蔵の1860-1880年の世界地図(帳)16種を調べた。『萬國小學地圖』を含むこれらの学習補助用の世界地図(帳)は、CCMに比較し、簡略で『地学事始』の内容に対応できないと判断した。『地学事始』

を使用した際、地名等の指導は如何に行われたのだろうか。

## VIII おわりに

『地学事始』全体をことごとく点検したのではなく、一部分を抽出し、調査した結果から導き出した結論であるが、本書の原拠本の一冊がコルネル著 HSG であると同定した。

I において示した留意点を検討してみよう。第一の点について、松山が本書を訳述する理由は、福沢の薦めと彼自身の子供への関心からではなからうか。第二の点について、IIIで言及したように、本書作成の意図は松山と福沢とは類似しているが、形態、表記法には相違点が多数見受けられる。第三の点について、次のことが判明した。HSGを参照している部分の翻訳を検討すると、地理(学)にほとんど接していない婦女子に理解しやすい日本語に訳されている。これは、II-1、で記したように松山が蘭学をはじめ、漢文学、漢詩、英語に通じ言葉のセンスに長けていたからである。

今後の課題がいくつか見出される。松山が本書を訳述する際、利用・参照した HSG 以外の典拠本の調査がまず、あげられる。松山自身の思考を分析する上でも重要な作業であるから。VIで比較した国別地誌の対象国をアジア他の地域へ拡大することが不可決である。それにより彼の世界観をすることが可能になるのでは。さらに、本書の読者層を調査・分析する必要性を感じた。本書が明治初期に小学の教科書として採用されていた事実は明確である。このほかに、文部省(1964: 174丁(オ))によると、1872年2月に開設された東京女学校<sup>35)</sup>の「学科教授書籍名」(文部省1964: 175丁(オ))に『コル子ル小地理書』とともに本書が掲載されている。IVで記した海軍省翻訳局とも考えあわせると、幅広い機関、読者層で活用されたのではなからうか<sup>36)</sup>。これらの事柄については、後日の幅広い調査、検討を感じている。

本研究の一部は、2017年度文部科学省科学研究補助(基盤研究(B)研究課題「場所・物質・人の関係性に注目した地の形成に関する地理学史研究」)(研究代表者: 福田珠己 課題番号: 17H02430)の研究集会(2017年12月17日 於大阪府立学I-siteなんば)にて発表された。参加者から有意義なご助言がなされた。『地学事始』の序文の解説に白石 克氏のご協力を得た。皆様に謹んで、感謝の意を表す。

## 注

- 1) 学習院史編纂委員会(1963: 3)によると、「嘉永二年(一八四九)四月に、孝明天皇が「学習院」の勅額を賜り…学習院の院号がきまった」と記されている。
- 2) Sargent's standard third readerを深間内基(塾生 1846-1901)も『啓蒙修身録』(1873年6月刊)中で翻訳している。布川(2008: 144)は、それらを比較すると、「両者の翻訳の仕上がりは若干異なっており、松山棟庵訳の方が比較的原文に忠実で、なおかつ読みやすいような印象を受ける」と評している。『地学事始』に対する筆者と同様な感想を述べている。
- 3) 1858年、福沢により、江戸築地鉄砲州にて創設。1863年、英語塾となる。1868(慶応4)年、移転し「慶應義塾」となる(富田1992: 276-277)・(事典福沢論吉事典編集委員会2010: 102)。
- 4) 慶應義塾塾監局塾史資料室(1979: 13)による。
- 5) 鈴木(1943: 273)では正月に「大学東校出仕中助教授拜命」と記されている。
- 6) 近藤薫は近藤良薫(? -1902)。慶応義塾(1968: 484)に「明治元(1868)年十一月十一日入塾、横浜の十全病院に院長を勤む」と記されている。微妙楼主人(1890: 20)によると、「往年鎌倉ニ海濱院ヲ設立シ内外人ノ海水浴場ニ供シタルハ君ガ功蹟トシテ噴賞スル処ナリ」と記載されている。医療としての海水浴を推奨しているのであろう。
- 7) 原本:(タイトル) Sargent's third reader (別タイトル) 慶應義塾読本 明治四(1871)年開版。79p.(大きさ)19cm。(請求記号): W4-13-1。
- 8) 森下岩楠(1852-1919)。塾生。
- 9) 土屋寛信(1841-1907)(深瀬1999: 386-387)。慶應義塾との関係について、石戸(1893: 139)によれば、1869年3月から10月まで同塾へ通学。1870年1月から1872年3月まで同塾にて英学を修めると記されている。深瀬(1999: 387)によると、「維新後には慶應医学校[医学所1873年設立、1880年閉鎖]に入学して、米国医師ヨングハンズから医学を学んだ」と記載されている。医学所の校長は松山棟庵である。
- 10) 新宮涼園(1852-1925)。鈴木(1943: 12)によると、本稿p.1の新宮涼介の長男。新宮涼民の娘と結婚。
- 11) 坂本育太郎(1867-1916)。鈴木(1943: 244)によると、青年時代から棟庵門下で、松山病院の副院長を務めた。棟庵の次女と結婚。
- 12) 石山(1981: 445)は、「アメリカのコロネル、ミッチェラの地理学書、パーレイやグードリッチらの歴史学教科書から摘訳した編訳書」と述べている。
- 13) 福沢門下生である古川正雄(1837-1877)著『絵入り智慧の環』(1870年刊)二編上万国尽の巻ではアジア→アフリカ→ヨーロッパ→北アメリカの順で記述されている。
- 14) 13)中の「世界国々の旗」(古川1870: 2丁(オ)-25(ウ))では、国旗、軍旗等を色刷りで示している。「はしがき」(古川: 1870)の終わりに、「明治三庚午年十月十五日」、奥付には「明治三庚午年十一月 官許」と記されている。ほぼ、
- 『地学事始』と同時期に刊行された。両者共に国旗を色刷りで紹介。
- 15) 文部省 明治5年9月8日布達番外「中学教則略並小学教則頒布」。
- 16) 文部省 明治6年5月19日布達第76号「小学教則頒布」。
- 17) 国立公文書館アジア歴史資料センター件名標題「辛1号大日記 翻訳局申出 地学事始其外買入方の件」レファレンスコード: C09111076200。
- 18) Cornellの生没年については斎藤(2005: 415)を参照。Pitter(1999: 303)によると、Cornellは米国において、1890年代以前に活躍した女性地理学教育者の一人として取り上げられている。
- 19) 両書の各国版についての調査は、後日への課題である。
- 20) ハードカバー、ペーパーバック共に刊行されている。筆者はネット販売を通じ、1863年版覆刻のHardPress pub. 2012年刊(soft cover) (print on demand)を入手。
- 21) 慶應義塾大学三田メディアセンターに本書の図書原簿での受入れ年等の確認を依頼した(2017年10月)。原簿には空欄で不明との回答を得た。
- 22) 小幡(1842-1905) 慶應義塾塾長に就任。同日課表には松山の名も記されている。松山は「コラミング氏人身窮理書会読」を担当していた。HSGを講じていない。
- 23) 荒川(1997: 260)によると、「地軸」は理雅各(James Legge)原著『智環啓蒙塾課初歩』(1856)(筆者未見)に登場していると記している。早稲田大学図書館蔵本[柳河春三 訓点](1866年翻刻)の二十八丁(ウ)、SECTION XIV “The air and the heavens”中に“the axis”としられている。一方、第十四回天気諸天論中に「為地軸盡處」と対訳されている。
- 24) 斎藤(2009: 420)によると、『地理初歩』中では“promontory”に「巒」の訳語を当てている。
- 25) 語「回帰線」の形成については、荒川(1997: 77-94)の2.和製漢語の誕生—「回帰線」を参照。
- 26) Cornell's grammar-school geography (1867: 11) のPolitical geographyの項にも同図が掲載されている。
- 27) 松山は、sq.miles(平方マイル)を方里(平方里のこと)と訳す。数字は変更しない。
- 28) 1872年5月、新橋と横浜間で鉄道が仮開業した。明治文化研究会(1969: 808)によると、「明治五[1872]年、…この名称[鉄道]はこゝに一定せりと記されている。
- 29) 明治文化研究会(1969: 792)によると、「書物の上にて、嘉永七[1854]版[遠西奇器述]に、蒸汽車ステームワーゲンの一項あり」と記されている。
- 30) 中山(1982: 12)によると、1873(明治6)年2月8日付け東京日日新聞の記事「阪神間汽車試運転 穴道は煉瓦で口む之をトンネルといふ」が記載されている。「隧道」とは訳していない。
- 31) “the south bank of Firth of Forth [フォース湾]”(p. 177)を「東海浜(ひがしうみひん)の入海」(巻の二10丁(オ))と訳出している。P. 184ダブリンの解説中、“the Liffey”[リフィー川]も「東海浜」と訳している。明治初期には地名・山川等を調べる詳しいツールが存在しなかったためなのか。

- 32) 例えば、松山(巻の二10丁(ワ))は「スナウドンといふ山あり…」と記しているが、『地学事始』に付されている地図では見出せない。
- 33) Stapleton and Steck (1975: 105) に記載されている“Mitchell's school atlas. 1872. Rev. ed.”に相当するののか。後日、比較校合したい。
- 34) 後年のことであるが、海後(1966: 595)は「明治13年(1880)頃にかけて何種類かの附図が文部省の地理教科書を授ける際に使用させる目的で出版されている」と記している。
- 35) 文部省(1964: 174丁(ワ))によると、「学校ノ体裁ハ尋常小学科ニ英語学ヲ加ヘ…女子学校ノ模範タランコトヲ期スルニ在ルナリ」と記されている。
- 36) この点に関し、海後(1966: 584)も1872年前後の地理教科書について「その何れも小学校教科書としてよりも、一般啓蒙のための教養書として刊行されたものである」と記述している。

## 文献

- 阿部泰藏(訳) 1874. 『万国小学地図』阿部泰藏。(外題紙に「阿部泰藏反刻」とあり)
- 荒川清秀 1997. 『近代日中學術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に』白帝社。
- 池田哲郎 1965. 佐倉藩英学書志一本邦英学発祥期の一駒。日本英学史研究会研究報告23: 1-17.
- 池田保之助 1902. 『京都小学三十年史』合資商業会社。復刻版: 1981年。第一書房。
- 石戸頼一 1893. 『大日医家実伝』石戸頼一。DL
- 市古貞次[ほか] 1993. 『国書人名辞典 第一巻』岩波書店。
- 大庭穠治 1996. 菱文庫に見る英米地理書について。 葵: 静岡県立中央図書館報, 30: 32-41.
- 大野原一松編集, 安田敬齋校訂 1877. 『小学用地図 万国地誌略付図』中島徳兵衛[ほか].
- 海後宗臣 1966. 『日本教科書大系 近代編 第十七巻 地理(三)』講談社。
- 学習院史編纂委員会 1963. 『学習院の歩み』学習院。
- 金子宏二 1979. 『藩学養賢堂蔵洋書目録』について—慶応三年福沢諭吉将来本。早稲田大学図書館紀要20: 98-113.
- 唐沢富太郎 1982. 『明治初期教育稀観書集成(三)解説』雄松堂書店。
- 慶応義塾 1958. 『慶応義塾百年史 上巻』慶応義塾。
- 慶応義塾 2001. 『福沢諭吉書簡集 第一巻』岩波書店。
- 慶応義塾塾監局塾史資料室1979. 『調査史料集 慶応義塾入社帳 第一』慶応義塾塾監局塾史資料室。
- 慶応義塾福沢研究センター 2004. 『慶応義塾社中之約束』(影印版)慶応義塾福沢研究センター 小室正紀。
- 国史大辞典編集委員会 1980. 『国史大辞典 第二巻(う〜お)』吉川弘文館。
- 近藤 薫筆記, 松山棟庵閔 1872. 『微毒小箒』青黎閣。題言によると、「合衆国 設孟斯著」とあり。DL
- 齋藤元子 2005. 師範学校編纂『地理初歩』とその底本。地理学評論78(6): 423-425.
- 齋藤元子 2009. コーネルの地理書の幕末・明治初期の日本への影響。お茶の水地理49: 27-48.
- 坂本育太郎纂述, 松山棟庵閔 1892. 『実用眼科要領』誠心堂。DL
- 佐藤秀夫 1986. 『府県史料 教育15 京都府』ゆまに書房。
- 島津俊之 2005. 明治前期の郷土概念と郷土地理教育。和歌山地理, 25: 30-63.
- 鈴木要吾 1943. 『松山棟庵先生伝』松山病院。DL
- 関 儀一郎, 関 義直 1966. 『近世漢学者伝記著作大事典; 附系譜, 年表』第2版 琳郎閣書店。
- 田代直人 1977. ハイ・スクールの形成に関する一考察—中等教育標準化の動向・・・C・W・Eliotを中心として。広島大学教育学部紀要第一部26: 73-81.
- 土屋寛信抄訳, 松山棟庵閔 1876. 『新薬性功』丸屋善七。DL
- 東京大学百年史編集委員会 1984. 『東京大学百年史 通史1』東京大学出版局。
- 富田正文 1992. 『考証 福沢諭吉 上』岩波書店。
- 内閣官報局 1974. 『法令全書 第五巻—2』原書房。復刻原本: 1889年刊。
- 内閣官報局 1975. 『法令全書 第六巻—2』原書房。復刻原本: 1889年刊。
- 中川浩一 1978. 『近代地理教育の源流』古今書院。
- 中山泰昌 1982. 『新聞集成 明治編年史 2』(復刻版) 本邦書籍。初版: 1920年刊。
- 微妙楼主人 1890. 『開業医立志編 横浜部』植村八郎。
- 深瀬泰旦 1999. 明治12年沖繩県のコレラ流行と土屋寛信。日本医学史雑誌45(3): 373-400.
- 深間内基訳述 1873. 『啓蒙修身録』2巻 名山閣。DL
- 府川源一郎 2008. アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐる—明治初期の子ども読み物と教育の接点。文学9(4): 140-151.
- 福沢諭吉 1869. 『西洋事情』6巻 岡田屋嘉七。
- 福沢諭吉事典編集委員会 2010. 『福沢諭吉事典』慶応義塾。
- 古川正雄 1870. 『絵入智慧の環 二編上 万国尽の巻』[古川正雄]: 岡田屋嘉七(発売)。
- 松山棟庵 1868. 『室扶新論』2巻 棲霞堂。DL
- 松山棟庵訳述 1870. 『地学事始』3巻 慶應義塾出版局。尚古堂。
- 松山棟庵訳 1873a. 『サルゼント氏第三リイドル』2巻 慶応義塾。DL
- 松山棟庵・森下岩楠合訳 1873b. 『初学人身窮理』2巻 慶応義塾同社。DL
- 松山棟庵訳 1874. 『傑氏万邦史略』5巻 松山棟庵。DL
- 松山棟庵編纂 1880. 『初学人身窮理後篇』3巻 棲霞堂。DL
- 松山棟庵・新宮涼園共訳 1882. 『業説簡明—一名 藥物韻府』丸善。DL
- 溝口健二 1995. 『草の葉』以前のウォルト・ホイットマン: 1840年代の短編小説を中心にして。大同工業大学紀要31: 5-12.
- 源 昌久 1997. 福沢諭吉著『万国尽』に関する一研究—書

- 誌学的調査. 空間・社会・地理思想2: 2-18.
- 宮地誠哉 1984. 『アメリカの中等教育—ハイ・スクールの成立と発展』学事出版.
- 明治文化研究会 1969. 『明治事物起原』(明治文化全集 別巻) (復刻版) 日本評論社.
- 文部省編 1964. 『文部省第一年報』宣文堂. 原本の出版事項: [文部省] [1875]
- 安岡昭男. 2010. 『幕末維新大人名事典 上』新人物往来社.
- Cornell, S, S. 1856a. *Cornell's high school geography: forming part third of a systematic series of school geographies, comprising a description of world; arranged with special reference to the wants and capacities of pupils in the senior classes of public and private schools.* New York: D. Appleton & Co.
- Cornell, S, S. 1856b. *Cornell's atlas to Cornell's high school geography.* New York: D. Appleton & Co.
- OCLC Worldcat identities, 2018. "Cornell, S. S. (Sophia S.)" <http://worldcat.org/identities/lccn-nr93044360/> (最終閲覧日: 2018年11月6日)
- Pittser, Sharan E. 1999. Early women geography educators, 1783-1932. *Journal of Geography* 98(6): 302-307.
- Stepleton, M. and Steck, V. 1970. *National union catalog pre-1956 imprints.* VOL.123. London: Masel
- Stepleton, M. and Steck, V. 1975. *National union catalog pre-1956 imprints.* VOL.388. London: Masel
- Surgent, Epes. 1871. *Sargent's third reader.*
- 別タイトル: 慶応義塾読本 言語: 英語